

## 小説「赤毛のアン」の持続可能性に観光が果たす役割

著者	島川 崇
雑誌名	観光学研究
号	9
ページ	47-56
発行年	2010-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00005084/">http://id.nii.ac.jp/1060/00005084/</a>

# 小説「赤毛のアン」の持続可能性に観光が果たす役割

島 川 崇\*

## 1 はじめに

近年の観光立国推進の動きを受けて、各地方自治体は観光誘客にしのぎを削っている。特にフィルムコミッションによる映画やドラマのロケ誘致は多くの自治体に取り組もうとしている施策である。しかし現状を俯瞰すると、ロケ地だけでしか話題にならない映画であったり、全国ネットで放映されたドラマであっても、放映時期が過ぎると忘れ去られていたりしているような作品だけを扱って満足している場合が少なくなく、また受け入れ側担当者が短期間で人事異動するため、ひとつの作品のシリーズを継続的に手がけることもままならない状況が散見される。これはサステナブル・ツーリズムの理論と対極にあるブームによる観光振興手法であると言える。ブームが過ぎるとまた新たなロケ誘致を住民からの税金を投入して行い続けることが果たして地域のブランド価値を向上しているのかという点と疑わしい。

一方、税金を積極的に投入しての誘致活動をせずとも、作品そのものの魅力だけでその舞台を訪ねるという観光行動を誘発し、世代を越えてサステナブルにその訪問客を維持している事例も存在する。「赤毛のアン」の舞台であるプリンスエドワード島はその好事例の一つと言えよう。そこで、なぜ人は赤毛のアンを読んでプリンスエドワード島に行くという観光行動に至るのか、そして、同島の関係者はどのようにしてサステナビリティを担保しているかを検討するために2009年8月に実際にプリンスエドワード島を訪問し、現地調査を試みた。

## 2 「赤毛のアン」とは

マルハニチロがカナダ産の肉を輸入する際に行った調査によると、実に97%の日本人が「赤毛のアン」という作品名を知っているという結果が出た。「赤毛のアン」の原作はL.M. モンゴメリが1908年に発表した「Anne of Green Gables」。実に100年もの長きにわたり世界中で愛されている、文字通り「不朽の名作」と呼ぶに相応しい作品である。

カナダの大西洋岸に浮かぶ愛媛県ほどの面積の小さな島プリンスエドワード島を舞台に、老兄妹が孤児院から間違って引き取った少女が村の人々との交流を深めていく中で立派に成長し、素敵な男性と結婚、個性あふれる子どもに恵まれて幸せな家庭を築いていく一連の物語は「アン・ブッ

\*東洋大学国際地域学部；Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

クス」<sup>①</sup>として知られており、翻訳された言語は24ヶ国語とも40ヶ国語とも言われ、実に世界中で5000万部以上も出版されているという。

写真1 “Anne of Green Gables” 初版本（Green Gables 展示）



（撮影）本稿の写真はすべて筆者撮影

日本では1952年に村岡花子による翻訳が出版されて以来、複数の翻訳者によって新訳本の出版が現在も続いている。また1979年にはアニメで放映され、アンという<sup>キャラクター</sup>人格は世代を越えて愛されている。各旅行会社が制作するカナダのパンフレットには必ずと言っていいほど「赤毛のアン」の舞台を訪ねるツアーが掲載されており、総合旅行業務取扱管理者試験の観光地理分野での出題の常連である。日本中にアンのファンクラブやサークルが存在し、作品の舞台であるプリンスエドワード島を訪ねる日本人は現在も後を絶たない。

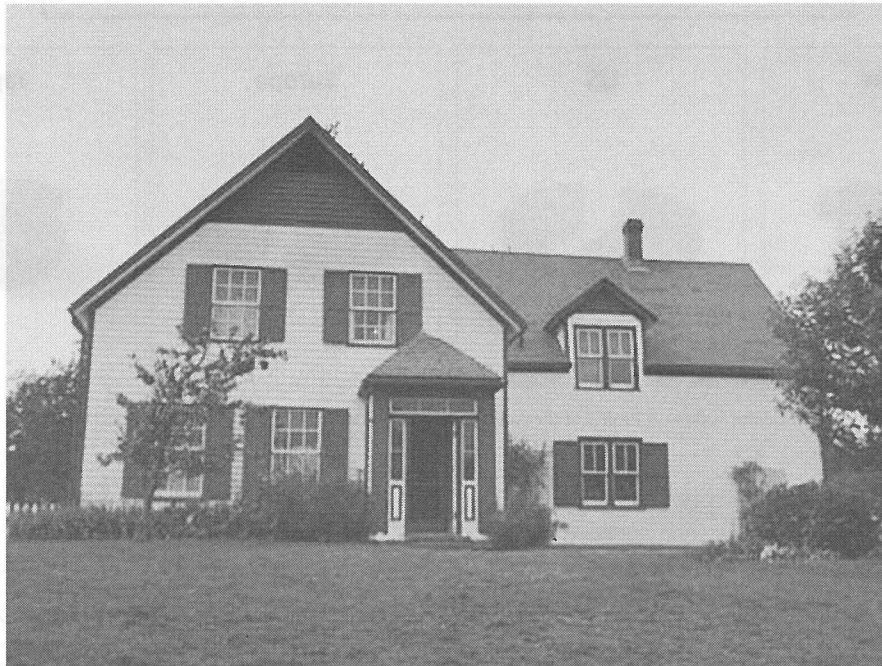
2008年は、モンゴメリの初版がボストンで出版されてからちょうど100周年にあたる年であった。主要地方都市の百貨店で「『赤毛のアン』展」が開かれたり、NHK教育テレビで女優の松坂慶子氏がプリンスエドワード島を訪ねて英語のフレーズを学習する番組が放映されたり、劇団四季によるミュージカルが復活したり、アンが孤児院に引き取られるまでを描いた新しい物語「Before Green Gables」を翻訳したアニメ「こんにちはアン」が制作されたり、優勝者にはプリンスエドワード島への旅行が贈られる「赤毛のアン」読書感想文コンテストが行われたり、まさに赤毛のアンが大きくクローズアップされた一年であった。旅行会社も出版100周年記念ツアーをラインナップに揃え、プリンスエドワード島への日本人観光客の入込み数は前年対比70%増にもなった。

### 3 赤毛のアンの舞台を訪ねる旅行者のプロファイル分析

#### (1) 全体の中の日本人観光客の位置づけ

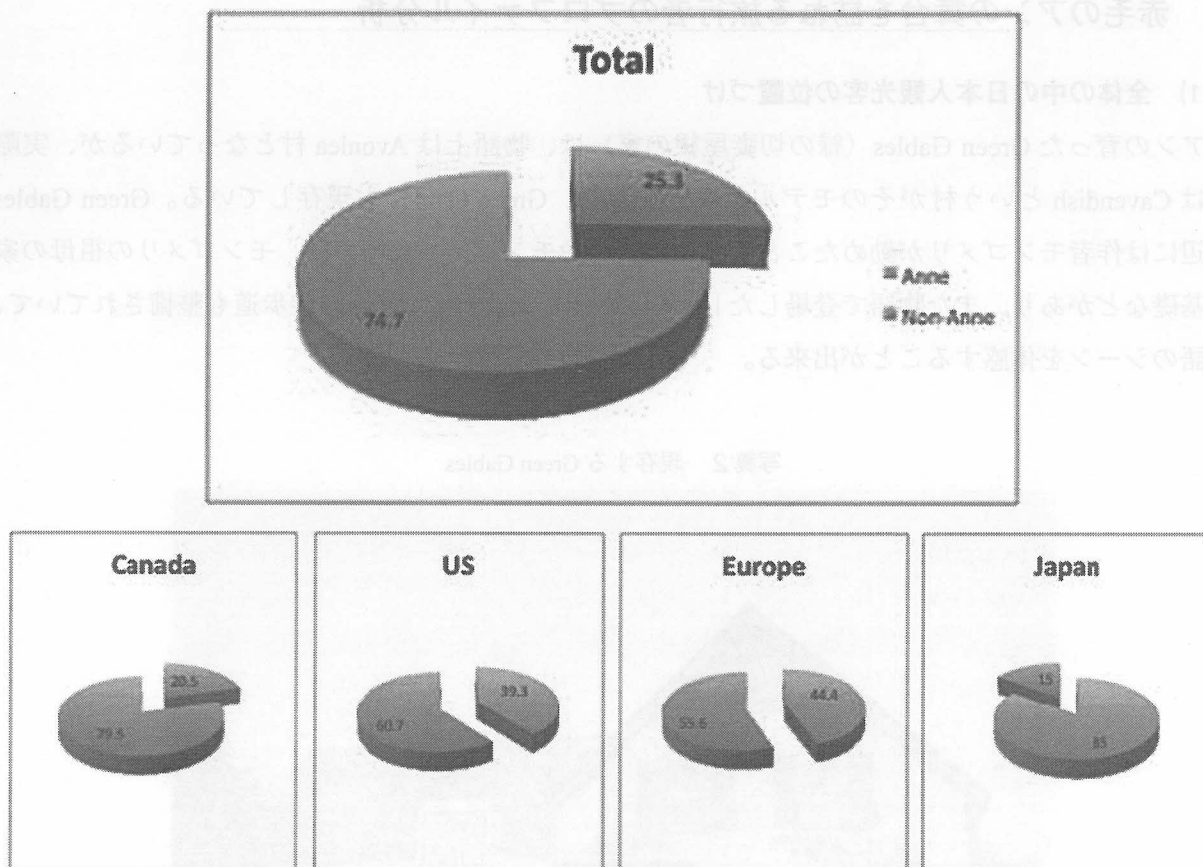
アンの育った Green Gables（緑の切妻屋根の家）は、物語上は Avonlea 村となっているが、実際には Cavendish という村がそのモデルとなっており、Green Gables も現存している。Green Gables 周辺には作者モンゴメリが勤めたこともある郵便局やモンゴメリ夫婦の墓、モンゴメリの祖母の家の基礎などがあり、また物語で登場した「恋人の小径」「お化けの森」等の遊歩道も整備されていて、物語のシーンを体感することが出来る。

写真2 現存する Green Gables



この Cavendish はもともとビーチリゾート地で、夏のシーズンにはカナダ国内だけでなく米国からも多くのリゾート客が訪れている。プリンスエドワード島大学の観光学研究センターの調査（2008）によると 2007 年夏の観光シーズン（6 月 27 日から 9 月 30 日）の島への入込客数のうち、アン関連の施設およびアトラクションを経験した観光客の割合は 25.3%にとどまっている。この割合はカナダ国内からの観光客は 20.5%、米国人は 39.3%、欧州人 44.4%であるのに対し、日本人は 85.0%にもものぼる。このような高い比率でアンのアトラクションを訪問しているのは日本人だけである。島全体の観光客の中で日本人の占める比率はわずか 0.4%であるにもかかわらず、アンのアトラクションでは外国人観光客の 15.6%を日本人が占める。そして昨年の出版 100 周年行事に最も反応したのも日本人だった。プリンスエドワード島州観光局においても日本マーケットはそのボリュームからは破格の扱いで対応されていた。

図1 発地別アン・アトラクション経験者割合



(出所) The Tourism Research Centre (2008) A Profile of the Anne Tourism Market, University of PEI より筆者作成

## (2) 世代別日本人観光客分析

なぜ日本人観光客がここまで赤毛のアン目的で島を訪れるのか、様々な理由が考えられるが、日本は旅行会社主導で様々な工夫されたツアーが提案されていることと、赤毛のアン日本語翻訳版が出版された戦後間もない頃、敗戦にうちひしがれた少女たちの心を射抜き、根強いファンとなって、彼女たちが母となった時に娘たちに読み伝えていることが最大の要因であろう。しかし、実際に訪れている世代を見ると満遍なく世代を越えて訪れているのではなく、一定の偏りが見られることが判明した。

表1は現地アトラクション、日本側旅行会社、受け入れ側ランドオペレーター、観光局担当者等のヒアリングおよび現在実際に訪れている日本人観光客の目視により、見て取れた傾向と時代背景を表にしたものである。なお、これはあくまでも「傾向」であることを断っておく。

最初にアンに飛びついた世代、すなわち、1950年代に10代を過ごした現在の70代前後の女性を「初代熱烈アンファン世代」と名付ける。この世代のアンに対する熱意は他の世代を凌駕しており、さらに娘とも仲がよく、進んで母と娘で旅行に行く世代である。

「初代熱烈アンファン世代」の娘にあたるのが1970年代前後に生まれ、現在40代前後の世代である。最近の流行語である「アラフォー」にあたり、総合職の先駆けとなった世代で金銭的にも苦



表 1 世代別「赤毛のアン」とのかかわり方

	1940	1945	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	
初代熱烈アンファン世代	0		10		20		30		40		50		60	70		初代アン世代。若いころに村岡訳をむさぼり読んだ世代。 娘とも仲がよく、進んで母と娘で旅行に行く
教科書アン世代			0		10		20		30		40		50	60		娘が派遣労働で大変。だんなは団塊で仕事中心。 金を持っているのでだんなをばっしておいて娘と旅行。
エアポケット					0		10		20		30		40	50		最初にアン旅行に食らいついた世代 若いころは新人類といわれた人たちで、基本的に自己中
二代目熱烈アンファン世代							0		10		20		30	40		初代アン世代の母に小さいときから読み聞かせてもっている。基本的にアンが好き。小学生のときにアニメを視聴していることも大きい。
氷河期世代									0		10		20	30		この世代は金がないので、親と行くか、新婚旅行でだんなと行く
ゆとり教育海外興味なし世代											0		10	20		この世代は旅行に行かない。ゆとり教育で勉強もしていないので、基本的に面倒なことには興味なし。
三代目熱烈アンファン世代を形成できるか？													0		10	可能性の高い世代

しくはない。この世代は1979年にアニメ放映されたときもリアルタイムに見ているので、母からの小説の読み聞かせとアニメの二段構えのきっかけを有している。この世代を「二代目熱烈アンファン世代」と呼ぶことにする。アンのファンはこの2層が中心となっている。

「初代熱烈アンファン世代」のちょうど下の世代、すなわち、1960年代に少女時代を過ごした現在の60代前後の層も、アンへの親和性が高い。この世代では、「赤毛のアン」が国語の教科書で取り上げられたこともあり、教科書で読んだことがきっかけとなった人も多く存在する。概してこの世代は勉強熱心である。そして御主人が団塊の世代の特徴である極めて典型的な仕事人間、会社人間であり、御主人を放っておいて、同性の友人同士でプリンスエドワード島を訪問する傾向が強い。御主人はアンに全く興味がないだけでなく、妻に対しても妻の意向を汲み取るというより自分の価値観でものを勝手に判断する傾向にあるため、荷物持ちのためだけにはその旅に同行しない。

この「教科書アン世代」層の娘は、その後の世代よりも勉強はしているのでアンも読んでいる。しかし、就職氷河期にあたっており、派遣労働等の劣悪な労働環境に苦しんでいるため、ロングの旅行になかなか出られる機会が「二代目熱烈アンファン世代」と比較すると低位にある。よって、プリンスエドワード島はまさに親に出してもらって親と一緒にいくか、新婚旅行で訪れることが多い。この世代の男性はかなり女性に対して優しくなっており、自分の意向を押し付けるより、女性の希望を汲み取る傾向にある。荷物持ちに徹するというより、妻の嗜好に多少興味をもっている感がある。

現在50代前後の層は、特に教科書で取り上げられたわけでもなく、アニメもなかった時代で、アンファンの層の厚さに関しては他世代と比較するとエアポケットのようにちょっと落ち込みが見られる。しかし、1985年にテンミリオン計画が発表され、海外旅行が国策として奨励され、1986年のプラザ合意に伴う円高傾向も相まって、海外旅行が熱狂的にはやった時代に20代後半から30代を過ごした世代となっている。そのため、アンの舞台を訪ねる旅に最初に反応した世代である。しかし、旅は好きでも、娘に読み聞かせを行っていないため、世代を越えての旅には至っていない。この層は御主人も海外旅行は嫌いではないので、仕事でまだ第一線で活躍している人はもちろん参加はしないが、好条件で第一線を退いている男性が荷物持ちで同行する傾向がある。

この世代の娘はちょうどゆとり教育が完成した世代で、基本的に勉強をしない。「赤毛のアン」の小説も親から読み聞かせを行ってもらっていない。アニメ「赤毛のアン」も見していない。さらに、面倒なことを嫌い、海外にも興味をもたないため、海外旅行には当然行かない。親も新人類と言われた世代なので放任されて育っている。そのような環境なので自ら「赤毛のアン」を読んだ経験を持つ人数も大きく低下する。この層の中で実際にプリンスエドワード島を訪問している人を見ると、新たな傾向を見つけることが出来る。それは、「赤毛のアン」の舞台というより、プリンスエドワード島の美しい風景を撮り続けている写真家吉村和敏氏の写真集に魅せられて、その写真集の撮影場所を訪れるという行動である。最近では、小説の中に登場するお菓子やキルトなどを紹介する「赤毛のアン」関連本も多く出版されており、その挿入写真として吉村氏の作品がよく採り上げられているため、吉村氏から赤毛のアンに至るという新しいきっかけも生まれている。

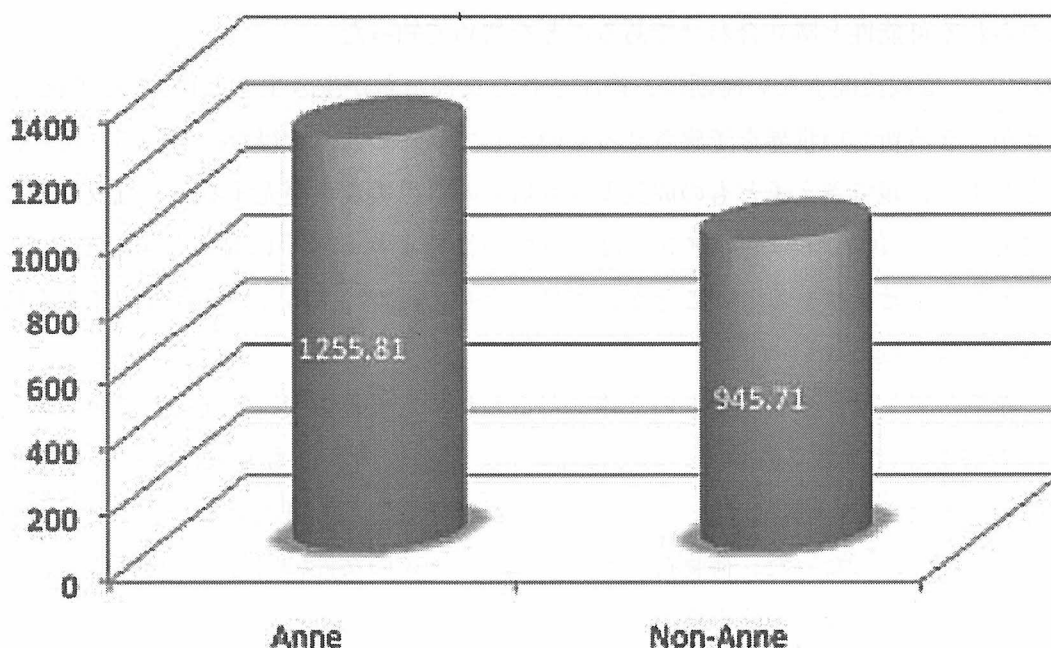
このように見てみると、だんだん赤毛のアンに興味をもつ層が薄くなり、近い将来『赤毛のアン』の舞台を訪ねる旅にとどまらず、作品「赤毛のアン」それ自体も危機的な状況に陥ることも想定できる。そこで、層の薄い現在 20 代の「ゆとり教育」世代に訴求しようとしても、小説を読む訓練が出来ていないことと、海外旅行に対するモチベーションが低いことから効果は限定的である。ここで、20 代は無視して、これからの 10 代に訴求していくことを提案したい。行き過ぎたゆとり教育の反省で、現在の学校現場ではよりディシプリンを重視した教育に戻りつつある。最近の若年層は「親や先輩の言うことにだまって従うことをせず、いちいち理由を問い、その行為に意味がなければ動かない」と言われているが、逆に考えると、正当な理由があれば興味を示すのである。このことから、長編小説を読むことや海外旅行に行くことの根本的な意義を問い直すことこそが、中途半端に迎合してゲームやネットでの訴求方法を考えるより効果的であるように思えてならない。

今回はヒアリング中心で結果をまとめたが、今後の課題として、実際に幅広い層にアンケートを実施して定量的な調査で裏付けを取る必要がある。

### (3) アン・アトラクションを楽しむ観光客とビーチリゾート客との比較

「赤毛のアン」の舞台を訪ねるツアー客は現地ではビーチリゾート客よりも大いに歓迎されている。なによりも彼らの誇りを理解して訪問しているということが第一だが、旅行グループ単位の総支出額を比較するとリゾート目的の場合 946.71CAD であるのに対し、アン目的の場合は 1255.81CAD にも上る (TRC, 2008) ことから、地元への経済効果も高いことも挙げられる。またアン目的のツアーの参加者の方が、学歴が高いというデータも出ている (TRC, 2008)。

図2 旅行グループ別総支出額 (単位：カナダドル)



(出所) The Tourism Research Centre (2008) A Profile of the Anne Tourism Market, University of PEI より筆者作成



しかし、市場規模としてはリゾート目的の方がはるかに大きいのはまぎれもない事実である。さらに、リピート率という点から分析すると、完璧にリゾート目的の方に軍配が上がる。アン目的だと3割近くの観光客は次回訪問するのに5年間以上の間隔があくのに対し、リゾート目的だと実に5割以上が1年以内に再訪している。

もし州観光局が入込客数の数値目標を達成することを第一義に考えているのなら、いつまた来てくれるか分からないアン目的の観光客より、目先の数字獲得のためにリゾートを全面に出してプロモーションをかけるであろう。さらに、サステイナブル・ツーリズムの従来の議論では、リピーターの獲得をなによりも優先することこそが観光の持続可能性を担保できるとされてきた。それに関わらず、プリンスエドワード島州観光局はぶれずにアン目的の旅をいかに持続的に発展させていくかを考えている。「赤毛のアン」を読んだ少女が母となり、娘に読み聞かせることで世代を越えてファンを繋げていく、そのための長期的な方策を検討している。それは、次世代に伝えるべき誇りこそが最も大切な資源であるという考え方に立脚している。このことから、ただ数値的に訪問しているリピーターの多寡で観光の成功失敗を図るのではなく、リピーターの位置づけを広義に捉え、たとえ喫緊に訪問をしていなくても、世代を越えてその魅力を語り継いでいたら立派なリピーターとして位置づけられるよう、サステイナブル・ツーリズムの議論を軌道修正しなければならない。

#### 4 まとめ

今回の調査研究をしてみて、多くの関係者と出会い、会話を重ねることで気がついたことは、不朽の名作と呼ばれる名作も、いろいろな関係者が苦勞しながら不朽であり続けるように不断の努力をしていることである。不朽の名声をひとたび得ればその後はずっと不朽なのではなく、どんな名作も忘れ去られる可能性と隣り合わせであることを初めて知った。

「赤毛のアン」は戦後間もない時期は、抑圧された女性たちが生き生きと自分の主張をして生きていくことができる新しい世界を予感させるものとして多くの共感を得た。そして、現在、他人に対してはもとより、親でさえ子どもの成長よりも自分の自己実現を優先するような自分勝手な世の中になってしまった中で、「赤毛のアン」は、自分の欲望よりも相手に対する思いやりを大切し、周囲の者とともに幸せに生きることこそが、本当の幸せを獲得できるという今日的意義を持っている作品であると言える。

そこで、赤毛のアンは、少女小説という枠にとらわれず、規範を失って迷走している現代の成人男性にも読者層を広げていくのがよいのではないか。旅は文学よりも万人にとっつきやすいという特性を持つため、新しい層に新しいマインドを浸透させることが可能である。また、今回のプロファイル分析で明らかになった、荷物持ちとしてアンファンの女性に同行する男性にも、帰国後に読者になってもらうような訴求法を検討すべきである。

今まで観光業界は、有形・無形の「資源」からベネフィットをもらってばかりだった。しかし、

これからは、観光が「資源」側に貢献する番ではないか。この観光側の発想の転換こそが、資源も観光もサステイナブルに共存していく要諦である。

(参考文献)

「赤毛のアン」他アン・ブックス 10 巻

Montgomery, L.M. (2004 年版) “Anne of Green Gables”

村岡花子訳 (1973 年版、2008 年版)

松本侑子訳 (1993)

掛川恭子訳 (1999)

The Tourism Research Centre (2008) A Profile of the Anne Tourism Market, University of PEI

The Guardian (2009) PEI beef may be off to Japan, Aug/6/2009

足立節子 (1998) 『「赤毛のアン」いま・むかし —松本侑子訳と村岡花子訳—』「日本児童文学」44 (5)、p100-108.

ギレン・M、中村妙子訳 (1988) 「赤毛のアンの世界 作者モンゴメリの生きた日々」新潮社

長谷雄一 (2005) 『赤毛のアン』の児童文学的意義と幼児教育学的考察 (赤毛のアンのご郷プリンス・エドワード島を訪ねて)』「大阪城南女子短期大学研究紀要」40、pp.13-23

松本侑子 (2008a) 「赤毛のアンへの旅 秘められた愛と謎」日本放送出版協会

松本侑子 (2008b) 「赤毛のアンへの旅 あこがれのプリンスエドワード島へ」日本放送出版協会

茂木健一郎 (2008) 「『赤毛のアン』に学ぶ幸福になる方法」講談社

NHK 取材班 (2008) 「赤毛のアン・夢紀行」日本放送出版協会

山本史郎 (2008) 「東大の教室で『赤毛のアン』を読む」東京大学出版会

吉沢博子、吉村和敏 (2007) 「プリンスエドワード島と東カナダ 『赤毛のアン』のご郷とカナダのルーツをたどる」日経 BP 企画

## The Role of Tourism Contributing into Sustainability of “Anne of Green Gables” as an Immortal literary classic

(英文要約)

「赤毛のアン」は、アン・シャーロット・バンスの著書である。

Montgomery, L.M. (2004) *Anne of Green Gables*

付録 2004 年版 (1973 年版、2004 年版)

日本版 (1973)

日本版 (1973)

The Tourism Research Centre (2008) *A Profile of the Anne Tourism Market, University of PEI*

The Guardian (2009) *PEI bed may be off to Japan, Aug 2009*

山本 隆子 (1998) 「赤毛のアン」の「アン」の「アン」——松本隆子と付録 2004 年版 (1973 年版) 44 (2)

4100-108

山本 隆子 (1998) 「赤毛のアン」の「アン」の「アン」——松本隆子と付録 2004 年版 (1973 年版) 44 (2)

山本 隆子 (1998) 「赤毛のアン」の「アン」の「アン」——松本隆子と付録 2004 年版 (1973 年版) 44 (2)

山本 隆子 (1998) 「赤毛のアン」の「アン」の「アン」——松本隆子と付録 2004 年版 (1973 年版) 44 (2)

山本 隆子 (1998) 「赤毛のアン」の「アン」の「アン」——松本隆子と付録 2004 年版 (1973 年版) 44 (2)

山本 隆子 (1998) 「赤毛のアン」の「アン」の「アン」——松本隆子と付録 2004 年版 (1973 年版) 44 (2)

山本 隆子 (1998) 「赤毛のアン」の「アン」の「アン」——松本隆子と付録 2004 年版 (1973 年版) 44 (2)

山本 隆子 (1998) 「赤毛のアン」の「アン」の「アン」——松本隆子と付録 2004 年版 (1973 年版) 44 (2)

山本 隆子 (1998) 「赤毛のアン」の「アン」の「アン」——松本隆子と付録 2004 年版 (1973 年版) 44 (2)

山本 隆子 (1998) 「赤毛のアン」の「アン」の「アン」——松本隆子と付録 2004 年版 (1973 年版) 44 (2)

山本 隆子